

都市交流学序説

Introduction to Interdisciplinary Urban Studies

山 本 賢 治

キーワード：グローバリゼーション、市場経済、観光、社会的排除、多文化共生

はじめに

1980年代以降のグローバリゼーションの急激な進行のなかで、いまや都市は国家を越えた都市間交流によって独自の存在意義と相対的自律性を強めている。そして都市の生活世界も「グローバル」と「ローカル」が共振して創り出される重層性を帯びたものになってきている。すなわちグローバリゼーションは、他方で都市のローカルな個性が発展する条件ともなっているのである。ところでグローバリゼーションは、地球レベルでの市場経済の拡大を背景としているが、そのことは人間生活のグローバルな交流をも意味している。そして生活のグローバル化は、一方では人間に文明的快適さを与えるとともに、他方ではさまざまな文化的貧困を与える。たとえば今日の都市住民の生活は、資本によってさまざまな生活物資やサービスや土地までもが「商品化」され、空間や環境が資本によって包摂され、階層的格差が増大してきている。そうした格差を是正し、グローバル化する資本とローカルな人間的要求との対抗関係を調停すべき国民国家は、その機能を喪失しつつあり、福祉国家の行き詰まりやケインズ主義の破綻と言われる状況を呈している。

しかし、資本活動や市場経済のユニバーサル性、すなわち「資本や市場経済が人間の物質的・文化的欲望の普遍的充足を実現してくれる」という信仰はくずれつつある。これはゆきすぎた市場原理主義やグローバリゼーションへの反省であり、2008年のアメリカに端を発するグローバル市場経済の危機によって一挙に顕著となった。すなわち個別的個人を単位として「商品化」によって物質・文化的欲望を充足するという生活様式は、そのために犠牲となる人間と自然の貧困をもたらし、また自然と共生する人間として、あるいは他者との精神的交流の社会的存在として、きわめて狭隘な形式である。

いまや市場経済を基盤とするグローバリゼーションの限界を認識し、物質・文化的欲望を反省し、自然や他者との共生を求める精神的交流への欲求が広がり始めている。そうした新しい文化や欲求は、人々のローカルな生活の場に根ざしており、現代都市においてもこうしたローカ

るな人間的欲求を基礎にした交流のあり方が求められている。

1. グローバリズムと市場社会

1980年代の新自由主義つまり市場経済強化政策は、所得格差や雇用不安、あるいは金融グローバリズムのもたらす為替の変動など、不安定な経済問題を生み出したにもかかわらず、1990年に社会主義が崩壊したことによって、利潤社会をめぐる自由競争と国境を越えた資本の流動の徹底によって、その機能を強化してきた。その市場原理主義の必然的帰結がグローバル経済あるいはグローバリズムとよばれるものである。しかし市場原理主義がとてつもない経済的混乱を引き起こすであろうことは、以前からある程度予測されていたことであり、2008年の「リーマン・ショック」によってそのことは現実となったのである。

グローバリズム、すなわちグローバルな市場競争という現実は、たしかに否定のできない趨勢であり、一般的に経済だけに限定されず、人やモノや情報などの脱国家的な流動は確実に進展している。したがって、こうした動きを意図的に逆転し、自給自足的な閉鎖的経済へと転換し、あるいは計画経済へ押し戻すことは不可能である。しかしグローバル市場経済に対して、その正当性を問いただし、あるいはその矛盾を解明する作業は必要であろう。

グローバリズムは、たしかに世界的規模での資源配分上の効率性や市場競争による生産性の向上をもたらすかもしれないが、同時に所得分配の不平等をもたらし、また賃金の低下や失業を招くことによって、労働者の生活水準の悪化をもたらすという点は、経済学者によって指摘されているところである。しかしグローバル市場経済に対するより本質的な批判は、それが社会そのものの土台を構成している「社会的価値」を破壊してしまうという点である。この点についてソロス (Soros, G.) は「社会的価値は他人への思いやり、つまりわれわれが属するコミュニティへの気遣いを表現している」と述べ、市場原理主義は社会的価値を尊重しないがゆえに危険なものだと見なしている¹⁾。すなわち社会的価値とは、ローカルなコミュニティへの配慮や自発的参加を基礎にして、伝統や慣習と結びついた道徳的価値や規範を含むものである。

こうした社会的価値を有し、コミュニティへの帰属意識を有して、人々は生活を組織できるのである。しかし市場経済はコミュニティを形成しないのであり、ましてやグローバル経済の舞台においてはそうである。経済の空間的な拡大は、個人の自由の拡大を伴うが、その個人が道徳や規範に従って生きるはずのコミュニティを破壊することによって、市場経済そのものが不安定化するという矛盾を持つ。社会的価値をもったコミュニティにおける生活の破壊とは、社会秩序の解体をも意味する。

ところで今日のグローバリズムは、アメリカ的市場の価値観の拡大でもあるが、そのアメリカにおいて、コミュニティの崩壊、家族の解体、犯罪や麻薬の増大といった、まさに社会秩序や社会的価値の崩壊が生じている。換言すれば、アメリカを典型とする西欧社会の近代化そのものに対して、絶対的な普遍的原理として疑問を抱かせる結果ともなっているのである。

このように見てくると、グローバリズムは、たんに「経済」や「市場」の問題だけではなく、それは「社会」や「文化」の領域の問題として考察される必要がある。

ここにおいてポランニー（Polanyi,K）の議論に注目しておこう。周知のようにポランニーは、経済を、「生活の経済」と「交換の経済」とに区別する。一般に経済学が規定する経済とは、主として利益動機に基づくところの生産と交換である「交換の経済」を意味しており、今日の市場経済はこうした「交換の経済」のかつてない大規模な表出である。これに対し、ポランニーの理解する「生活の経済」とは、人間の生存のための物質的代謝をめぐる集団的な生産と配分のプロセスであり、そうした人間の集団的な生存を確保するために、さまざまな慣習的規則や自生的な規制をそなえている。換言すれば、「生活の経済」とは「社会」そのものである。そして自由市場の拡大は、労働を流動的な商品に変え、特定の土地から切り離すがゆえに、生活の不確定性を強いるものである。その結果、市場経済は、生活の安定を確保するという生存の要請から、「生活の経済」の側からの抵抗に出会うことになる。ポランニーはこれを「社会の防衛」とよんだ²⁾。このポランニーの考え方に従えば、今日のグローバル市場の問題は、「市場の経済」と「生活の経済」の間の対立であり、すなわち「経済」と「社会」の抗争でもあると言えよう。

したがって、グローバリズムはもはや経済の問題だけではなく、社会生活や文化の次元で理解されなければならない。たとえば、リッツァ（Ritzer,G）の言う「マクドナルド化」は、グローバル化が消費様式の変化を通しての文化的意味を創出し、一方でのグローバルな消費文化の画一化と、他方でのローカルな多様化の進行を指摘している³⁾。すなわち画一的世界標準商品は、生活スタイルの世界的標準化をもたらすと同時に、マクドナルド化が各国によって異なっているという事実がある。換言すれば、グローバリズムは、文化的意味という次元において、画一化と多様化の衝突と調整が行われており、グローバリズムとローカリズムが複合しあう世界を形成してゆくのである。

2. グローバリゼーションと都市

一般にグローバリゼーションとは、地球規模での国境を越えたヒト、モノ、カネ、情報、文化などの交流の拡大と、必ずしも国家を介さない、さまざまな越境の主体の移動と活動の増大を意味している。そして都市のグローバル化は、「世界都市」の浮上や、都市の多民族化・多文化化をもたらしている。

いまや異なる諸主体や諸階層が交流する現代都市は、「グローバル」と「ローカル」の共振によって多様な都市的世界を創り出している。これに伴って、都市社会学も、従来の「一国社会学」の枠組みすなわち国民国家内部の研究にとどまらず、「ナショナルなもの」を越えるパラダイムが求められるようになってきている。とりわけ1980年代半ばになって、多国籍企業による海外活動の大幅な拡大によって、「生産と労働のグローバルな再配置」が進展し、そのグ

ローバル経済の結節点として急成長を遂げた世界中枢都市を「世界都市」と位置づける研究が始まった。たとえばサッセン（Sassen,S）によれば、製造等の仕事は地理的に拡散するのに対し、中枢の意思決定や管理の仕事は集中する傾向にあることに注目し、とりわけ金融、保険、不動産の動向に着目する⁴⁾。そして国際金融の中心としての役割が世界都市の性格を特徴づけていると考えた。さらにサッセンは世界都市内部の階層的分極化を指摘した。

すなわち世界都市化によって成長する産業部門内で、管理・事務・技術・研究等の高所得者と、清掃・警備・保安・飲食等の低所得者との間の階層的二極化が進行しているというのである。同時に1980年代以降は、地球規模での移民・難民が急増し、「グローバル・マイグレーション」とよばれる現象も進行している。日本においても外国人居住者が急増し、都市内部に多様な文化やエスニシティの混在が見られるようになってきている。

このように見てくると、元来都市は「異質性」を本質的要素として有しているが、グローバル化は階層性や多文化性に見られる都市の「差異」を一層促進しているといえる。ここで重要なことは、都市における「差異」をめぐるさまざまな社会関係や価値観が創出されている点である。その社会関係には二つの側面が見られる。

一つには、「社会的排除」や「差別」としてあらわれる過程である。階層や民族による差異は、グローバル化の進行にともなって、所得階層の格差拡大や新たな不平等を生みだしている。近年では、フォーマルな労働市場から排除される新しい貧困層の生成が問題となっており、同時に不平等の固定化により、都市社会の社会的統合度を弱める結果となっている。

二つには、さまざまな「差異の相互承認」あるいは「社会的包摂」としてあらわれる過程である。すなわち多国籍企業の本拠地としての「世界都市」ではなく、外国人居住者や多様な市民に開かれた「オルタナティブな世界都市」をめざす方向である。具体的にはNGOやNPOあるいはグローバルなシティズンシップの拡充を指向する多文化主義的なコミュニティのあり方を追求する価値観である。これはグローバル化を格差拡大の方向に向かわせるのではなく、異なる諸主体や諸階層が交流する共存的世界としての「グローバルな市民社会」に向かおうとするものである。

3. 都市と観光

グローバリゼーションを文化の次元でとらえると、一方では地球的規模での文化的画一化や文明的利便性の進行であり、他方では多様化・多文化化あるいは格差の拡大となってあらわれる。とりわけ文化の次元で問題となるのは、地域の個性の喪失であり、ローカルな個性や特色を維持していくことが「大交流時代」における重要な課題となる。たとえば観光という分野においても、その地域にしかない文化、食材、ライフスタイルがあってこそ交流を楽しむことができるのである。

ところで21世紀は「都市の時代」ともいえる世紀である。人類史を振り返ってみると、20世

紀末までは、地球上の人口の過半数は農村に居住していたのであり、いわゆる「農村型社会」であった。しかし21世紀に突入した現在、国連統計によれば、農村居住人口よりも都市居住人口の方が多くなっており、まさに人類は「都市型社会」の時代に入ったのであり、人間活動の中心舞台は都市となったのである。

さて都市は、人と人との交流を通して魅力ある都市文化を創造していく舞台であると同時に、犯罪や社会解体現象が集中する空間でもある。社会学的に整理すると、「都市的なもの」は、三つの要素からとらえられる。第一に、都市は「匿名社会」であり、物理的近接と社会的距離の遠隔化によって、二次的接触が優位となる社会である。俗に言う人間関係の希薄化であり、このことは都市の人間に「自由」と「孤独」の両面をもたらす。第二に、都市は「都市的生活様式」とよばれる特色ある生活様式を形成しており、商品消費と集会的消費を基盤とする相対的に豊かな生活が展開され、店舗・会社・役所等の専門処理機関による専門処理サービスによって高い利便性が維持されている。そして第三に、都市は社会心理的統一性としての「都市的統合性」を有しており、たとえば都会人特有のアーバン・パーソナリティが育まれる場所でもある。

いずれにせよ都市は大量の人口が集中する場所であり、その経済的理由は「集積の利益」に求められるが、人間文化論的次元で考えると、都市は「夢」と「不安」が交錯する場所でもある。たとえば農村から都市に移住する者の心の中には、都市への「あこがれ」と「おそれ」が微妙に混在する。そして都市への観光者の場合には、この中の「夢」や「あこがれ」の占めるウェイトが大きいと言えよう。

さて21世紀は都市の時代であると同時に、「観光の時代」でもある。1970年に創設された「世界観光機関」の統計によると、国際観光客数は、1960年に6900万人であったものが、1999年には6億6千万人となり、さらに2020年には16億人になると推計されている。このように多くの人が地球的規模で国境を越えて往来するようになったのは、人類史上20世紀の後半になって初めて実現した社会現象である。とくに国際観光の中心は今後アジアになると考えられ、20世紀末世界でもっとも多くの国際観光客を受け入れた国はフランス（約7千万人）であったが、2020年には中国が1億3千万人を受け入れると予想されている。

そして観光を産業としてみた場合、すでに世界最大の産業に成長しており、世界旅行産業会議の調査によると、2000年に世界の全雇用者数の12人に1人に相当する1億9千万人が観光産業で働いている。さらに2010年になると、新たに6千万人の雇用創出が予想されている。

ところで観光とは、一般的に「楽しみを目的とする旅行」と理解されているが、「観光」という言葉の語源は、中国の占いの教科書である「易経」に由来しており、「旅行者は他国の文化を仰ぎ見る、住民は自国の文化を誇らかに示す」という意味を有している。すなわち観光の目的は文化の交流にあることを示している。ちなみに「ツーリズム」という言葉は、ラテン語の「ろくろ」を意味する言葉が語源であり、ここから周遊という意味につながっている。

人と人との交流を通して魅力ある都市文化の創造をめざす都市交流学にとって、観光は一つの柱となる研究分野である。そこで都市と観光との関連について言及しておきたい。元来都市は、人と人とは無数に交わり、それゆえ「物語」がたくさん堆積する場所である。都市には、パリのエッフェル塔やロンドンのウェストミンスター寺院を持ち出すまでもなく、壮大な建造物があるだけでなく、その歴史の物語や文化の堆積があり、それらを求めて人が集まるのである。その意味において、もともと観光は都市観光であったとも言える。今日のような田舎や自然の風景を愛でる行為としての観光は近代になってからのことである。観光の原義は「国の光を見る」であり、人間の栄華を見ることである。したがって、観光の歴史をたどれば、まず都市観光があり、のちに自然・農村観光が生まれたのであって、とりわけ西洋ではその傾向が顕著であったと言える。たとえば18世紀のイギリスにおいて流行したグランドツアー（大観光）の時代の目的地はローマであった。そしてこうした観光を動機づけるものは、「日常」と「非日常」との対立、あるいは「俗」と「聖」の対立であり、観光動機の根源に非日常性への希求があると言えよう。

ところが、国境を越えたグローバリゼーションによって、現代社会の空間の圧縮は、次第に非日常性が日常化するというアイロニーの中に我々を投じることになる。流動化する生活空間の中で、我々は非日常性を手にすることが難しくなりながらも、さらなる非日常性を意識的に作り出す演出を続けようとする。都市空間ばかりでなく、観光客が少しでも訪れるところがあれば、たちまちのうちに「観光地」が出現する。ディズニーランドのようなテーマパークにとどまらず、日常の買い物空間、レストラン、ターミナル、古びた市場までもが、非日常空間に変身することがある。すなわち空間のイメージ化を非日常的に変化しようという作業が、不断に都市空間を変化させ、都市空間全体がディズニーランド化されつつある。我々は人工的に観光化された空間を高度に移動するようになっており、しだいに「観光」を抜きにして都市空間や現代社会を論じることができなくなりつつある。

4. 都市と文化

グローバル都市論の代表的研究者であるサッセンによれば、金融資本と高度専門サービス業を経済エンジンとして、グローバルな都市ヒエラルキーの頂点に立つ「グローバル都市」は、都市の内外に社会的地域の格差を生みだし、拡大してゆく。そしてその周辺に移民や日雇いや非正規労働者の集積する貧困地域を直視し、そこにグローバル都市の矛盾と限界を示している⁵⁾。また前述したように、グローバル化の最大の問題点は、不平等を拡大させるだけでなく、我々の文化としての「社会的価値」を破壊することである。

その結果、都市の在り方として、グローバル都市とは異なる方向をめざす動きとして、「コンパクトシティ」、「持続可能都市」、あるいは「創造都市」などの都市論が発展しつつある。これらに共通する認識は、市場原理的競争社会から、「環境と文化を重視する新たな福祉社会」

への転換の必要性を指摘するところにある。すなわち新自由主義的改革による「福祉国家」の解体を乗り越えて、新しい分権的な福祉社会をめざす社会改革の試みとも共通するところがある。

たとえば佐々木雅幸らの言う「創造都市」は、市民の創造活動を基礎とする文化産業の発展を軸に、水平的な都市ネットワークを広げ、文化的に多様なグローバル社会と社会包摂的なコミュニティの再構築をめざすものと位置づけられる。ここでいう社会包摂とは、1980年代から90年代にかけて欧州各国で新たに生じた社会問題や社会的排除の対立概念であり、社会的排除を生み出す諸要因を取り除き、人々の社会参加を進め、他の人々との相互的な関係を回復あるいは形成することを指している。

以上のような創造都市のネットワークが国内外に広がってゆくと、市場原理主義的なグローバリゼーション下でのグローバル都市を頂点とする文化的画一化に代わって、「文化多様性に富んだ、調和のとれたグローバリゼーション」という、グローバリゼーションの新しい流れが加速していくことになる。

このように見てくると、貧困と社会的排除という課題に立ち向かい、社会的価値の基礎となるコミュニティの再構築と、交流に基づく文化多様性に満ちた都市空間をめざすことが、都市交流学の課題となる。その研究は、社会的価値と経済的価値を両立させる社会経済システムの追求に結び付く作業でもある。

最後に都市交流学の課題について、二つほど付言しておきたい。一つは、都市の文化創造において、消費文化やメディア文化が果たす役割についてである。都市には、商業施設、教育・文化施設、マスメディアなどさまざまな文化装置が存在している。そしてこれらの文化装置は、何らかの文化的なメッセージを媒介し、人々と相互に影響を与えあいながら、社会を形成してゆく存在である。したがって、百貨店、商店街、ホテルなどをはじめとして、遊園地や祝祭、さらにはインターネットまでを含めて都市文化の創造の過程を展望することが重要になる。二つには、都市交流学の日本的課題として、「縮小社会」における地域再生の問題がある。人口減少社会に突入した日本は、限界集落とよばれるような小規模集落の衰退にとどまらず、都市部においても、ニュータウンのオールドタウン化や、地方都市の衰退減少が顕著になってきている。その結果、地域社会の再生をめざそうとするならば、定住人口だけでなく、交流人口の増加を図る必要がある。こうした縮小社会化に対応したサステナブルな地域づくりに関わる論理と想像力が都市交流学には求められるところである。

注

- 1) Soros,G. 1998. The Crisis of Global Capitalism: Open Society Endangered. New York: Public Affairs.
大原進訳、1999、『グローバル資本主義の危機』日本経済新聞社。
- 2) Polanyi,K. 1944. The Great Transformation. New York: Octagon Books. 吉沢英成他訳、1975、『大転換』東洋経済新報社。
- 3) Ritzer,G. 1993. The Macdonaldization of Society. Newbury Park, Calif. Pine Forge Press. 正岡寛司監訳、1999、『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版部。
- 4) Sassen,S. The Mobility of Labor and Capital. 1988. 森田桐郎訳、1992、『労働と資本の国際移動』岩波書店。
- 5) Sassen,S. 1991. The Global City. 伊豫谷登志翁監訳、2008、『グローバルシティ』筑摩書房。

参考文献

佐伯啓思・松原隆一郎、2002年、『新しい市場社会の構想』新世社。
高橋勇悦監修、菊池美代志・江上渉編、2002年、『21世紀の都市社会学』学文社。
似田貝香門・矢澤澄子・吉原直樹編著、2006年、『越境する都市とガバナンス』法政大学出版局。
須藤廣・遠藤英樹、2005年、『観光社会学』明石書店。
佐々木雅幸・水内俊雄編著、2009年、『創造都市と社会包摂』水曜社。